

富岡鉄斎没後 90 年

# 鉄 斎

— 仙境への道 —



2014年

4月1日(火) - 6月22日(日)

前期：4月1日(火) - 5月11日(日)

後期：5月16日(金) - 6月22日(日)

10時～16時

月曜日休館 但し4月28日・5月5日は開館

4月30日・5月7日は休館

近代文人画の巨匠富岡鉄斎（1836～1924）は大正13年、数え89歳の天寿を全うし、栄光につつまれた生涯を閉じた。平成17年（2005）、当館開館30周年を記念して「鉄斎—仙境への道—」展を開催した。没後90年にあたる本年、長寿を何よりの幸せとして、不老不死の仙人が住むという仙境に想いを馳せた鉄斎が、最後に到達した境地を描いた仙境図を取り上げて、再び「鉄斎—仙境への道—」展を開催することとする。年を経るにしたがって墨色が冴え、淡彩や濃彩を自在に用いた数々の仙境図を紹介してゆきたい。

**老荘思想への憧れ** 若いころより文人の嗜みとして詩や書画篆刻を学び、学者の道を志した鉄斎は老荘思想に親しみ、隠遁生活へ共感を覚え隠士や高潔の士に強い憧れを抱いていた。現在鉄斎の遺した作品のなかで最も若いときの作とされる元治元年（1864）29歳の《烟霞幽情図》（No1）の賛には、すでに俗世を避けることを詠む「竹間逃れ住んで幽情を愛す」の詩句が見られる。明治3年（1870）35歳で描いた大作《高士隱栖図・松雲僊境図》屏風（No3）の《高士隱栖図》（右隻）の賛には、明代の詩人李日華の「士人たるものは俗世の欲望を超越して天性のまま自由に生きてゆけば、自然に不老不死の神仙よりほんの少し劣るだけという立派な人間になれる」という意の詩を引き、「翁（李日華）は仕えず。其の事を高尚にす。故に其の言う所、淡にして旨有り」と識す。同じく李日華の「山は樵可し水は漁可し。大夫招けども車に登らず。（山では木が取れるし、水では魚が取れるので田園生活は楽しい。たとえ朝廷から大夫として召し出されるがあっても、士大夫の乗る車に乗って出仕するようなことはしない）」はたびたび賛に引用されている（No7《漁隱図》、No14《溪山勝概図》）。

老荘思想は老子にはじまるが、鉄斎は老子出関をテーマにした作品を晩年まで描いた。40歳代の作とされる《老子出関図・淵明遊興図》（No8）では、右幅に「老子が晩年周を去り玉門関で道德経上下二篇、八十一章五千余言を書いて去ったが、そのとき老子は百六十歳だった。それは道を修めて寿命を養ったからだ」という意を賛にした。対をなす左幅には東晋の詩人で官途に見切りをつけて故郷の田園に隱栖した陶淵明の「帰去来辞」のなかの句「日渉りて趣を為す」を引き、続いて淵明の伝記を賛にした。

鉄斎は官につかず私に記録するものを意味する「鉄斎外史」の号を終生用いたが、30代から世俗をのがれる人の意をもつ迂人、逸人、仙史、幽人、遯人、散人、山人などの付いた多くの号も用いている。世捨て人を意味する鉄道人の号は晩年までたびたび用いた。

以上あげた作品の賛文や号などからは、鉄斎が早くから隱逸の高士に想いを馳せ、超俗の生き方を自らに課していたことが充分に解される。

**鉄斎の仙境図** 鉄斎は神仙が住んでいるという蓬莱、瀛洲、方丈の三神山や武陵桃源図をはじめ多くの仙境図を描いている。

蓬莱山図は中国では古くから神仙山水の好画題として描かれ、我が国においても吉祥の図として親しまれてきた。蓬莱は渤海のはるか東にあり、仙人が住むとされる。60歳代の《蓬莱僊境図》（No15）や仙人が観法によって蓬莱山を幻じ、心を蓬莱山に遊ばせるという図を描いた86歳の《僊遊蓬莱図》（No43）では、その賛に北宋の張君房が編纂した道教の類書『雲笈七籤』の三島・蓬丘より、「蓬丘とは蓬莱山是れなり」から始まる蓬莱山の位置、大きさ、その景を述べる一文を引いている。また最晩年の《蓬莱山図》（No58）は画面下方から洞窟のある崖、神



3 高士隱栖図・松雲僊境図

（左隻）



（右隻）



59 扶桑仙境図

木、四阿あづまやを取り巻く梅花、山塊が自在の境地に達した自由奔放な筆致で描かれる。賛文「山は蓬萊に似て、人は僊に似たり」は蓬萊山図によく見られ、「人は僊に似たり」とは鉄斎自身のことを指しているかのようである。

蓬萊山に仙人が集うという《群僊集会図》(No.27)は絹本に巖を群青で、神木を緑青で、四阿あづまやを朱という極彩色で描かれた大作で、それぞれの色調は絶妙のバランスで置かれている。画面の細部にいたるまで緊張感があふれ、まるで迎えに出た神鹿に誘われて、賛にある「洞天福地」(仙人のいるところ)への道を登っていくような感さえ覚えさせる。

瀛洲を描いた80歳の作《東瀛神境図》(No.25)は水墨画の傑作として知られる。大画面にいっぱい墨色の濃淡を活かして東海に浮かぶ瀛洲が豪快に描かれ、墨に七彩ありの言葉のとおり鉄斎の水墨画の手法が発揮されている。因みに東瀛とは《東瀛神山図》(No.37)の箱に「此の東瀛神山けだは蓋し皇国の神宮を称するなり。其の詳しきことは平田氏あつたわ(平田篤胤)の三神山余考に見る」と識しているように日本を指しても用いられる。

89歳で亡くなる直前、翌年の正月掛用にと描かれた《扶桑神境図》(No.59)は鉄斎の仙境図のなかでも特に美しい。淡墨、濃墨、棒墨による墨のかすれを自在に用い、満開の梅花の中に点々と打たれた緑青がいつそうのさわやかさを生んでいる。賛は自作の詩で、「九十行年榮啓期。太平樂しみ多し幸男子。万象を揮毫して皆周易。八卦變爻、我が師と為す。(中国周代の隱者榮啓期が孔子に会い、人生の三樂(人として生まれ、男子として生まれ、行年九十であること)を語ったが、自分も榮啓期と同じ九十歳となり、太平の世にあって多くの楽しみを得た幸福ものである。森羅万象を絵に描くが、それは易の八卦變爻(天地万物の変化)を我が師としているのだ)」とある。90歳を迎えんとする鉄斎が自身の人生を振り返り、その心境を吐露した詩と、東海の日出るところに生えるという神木扶桑の茂る仙境の図は相俟って幸福感に満ち、観るものを魅了してやまない。因みに扶桑とは神木のことで中国東方の扶桑国にあり、日本を指すともいわれる。

鉄斎の用印の印材のなかに扶桑木と称するものがある。これは植物化石珪化木をいい、扶桑樹は四国の伊予にあるとされ、鉄斎は手に入れて印材とした(No.66、67)。また印文には長寿を願う句「寿比南山福如東海」(No.70)や「如南山之寿」(No.74)、脱俗の世界を表す言葉「山水友」(No.65)、「今世霞客」(No.66)や「山水為侶」(No.77)、文人の理想とする風雅の世界を詠んだ詩(No.78)を刻したものなどが見られる。俗塵はらを掃いのけた清浄な山居の意を表す「掃塵居」(No.73)は、鉄斎が用いた室号のひとつである。

今回は遺された印章の中から、本展にふさわしい印材や印文の印章を選んで展示し、鉄斎の目指した仙境を理解する一助としていただきたい。

長寿の喜び 喜寿を迎えた鉄斎は《福祿寿図》(No.21)の賛にその喜びを「風貌は寿老仙ちかに庶幾し」と詠んだ自作の詩を付した。さらに《寿老図》(No.48)では歳を重ねて米寿を迎え、自身の姿を写したと思われる寿老人を描き、「八十八年又新に遇う。兒童酒すずを肴めて咲顔頻りなり。泰平象しやう有り君看取せよ。我は是れ聖朝の寿老人」と喜びの詩を詠んで賛とした。88歳の新年を迎え、孫たちに囲まれ屠蘇を祝って笑顔がこぼれ、自らを今の世の寿老人だと喜ぶ鉄斎の姿を彷彿とさせる。

不老長生は吉祥画題のひとつであり、鉄斎は好んで描いている。《松芝剛勁図》(No.16)や《松芝不老図》(No.55)では冬でも落葉せず緑を保つことから長寿や吉祥の象徴とされる松の大木を中央に、その根元にはこれも寒

中に緑を保つことなどから吉祥を表す竹とともに霊芝が描かれている。また先にあげた《群僊集会図》(No27)では画面下方、集会に参加すべく到着した仙人を、まるで道案内するかのように朱の霊芝が描かれた。寿老人の杖や腰に添えて描かれたものも見られる。

霊芝は古来より瑞草<sup>ずいそう</sup>として珍重されてきた。明の李時珍<sup>りじちん</sup>の著『本草綱目』<sup>ほんぞうこうもく</sup>に、芝には青赤黄白黒紫の六色があり、六色の霊芝それぞれには「久しく食すれば身軽く老いず、年を延べ神仙ならしむ」と記されている。しかし「芝は腐朽の余気で生じるので、正に人に生じる瘤贅<sup>りゅうぜい</sup>(こぶ)のようなものだ。しかして古今皆これを瑞草として、また服食すれば仙人になると言っているのは、誠に謬ったことだ」という意も見える。また江戸時代中・後期の本草学者小野蘭山の講義の筆記を整理刊行した『本草綱目啓蒙』には「五色芝ハ仙薬ニシテ尋常ノ品ニ非ズ、其説所尤怪シク、信ズベカラズ」とあり、鉄斎も当然これらを目にしていたと思われる。

長寿を願う鉄斎は霊芝を手元に蔵していた。「家園生三秀草」と自身で箱書きした小さな桐箱のなかに、傘の直径が約5センチほどの黒い霊芝3個が大切に綿にくるまれて入っており、蓋の裏面には「鉄斎自籤於長椿堂」の文字がある。箱書にある家園とはもちろん鉄斎の住まいの庭のことであり、三秀草とは霊芝(マンネンタケ)のことである。長椿堂は当時交友のあった本草学者山本章夫(1827~1903)から贈られた大椿<sup>だいちん</sup>(八千歳を春とし、八千歳を秋とするという伝説上の長寿の霊木。時々白いいい香りの花を咲かせたというが、樹木の名は不明)が植えられていたことに因む堂号である。3個の霊芝の傘の裏にはそれぞれに採取した年が朱漆で明治39年、40年、41年と記されている。鉄斎は明治38年(1905)古稀を迎え多くの作品の落款に「古稀」の文字を書き添えた。その翌年、本草についても該博な知識を持つ鉄斎は自宅の庭で初めての霊芝を採取した。霊芝については先述の書物から当然知識は得ていても、やはり不老長寿を象徴する霊芝を採取できたことには、心底喜びを感じたことであろう。自身のこれからが健康であり喜寿、傘寿、米寿、さらに卒寿を迎えられるようにと祈りを込めて採り、箱に収めて愛蔵していたことは想像に難くない。



16 松芝剛勁図

幕末から明治大正の激動の時代を生き、多くの学者文人と交遊をもった鉄斎は、明代末の文人で書家であり画家である董其昌<sup>とうきしやう</sup>を信奉して傾倒し、その室号「画禅室」<sup>がぜんしつ</sup>から「画禅庵」を自身の室号にするほどであった。董其昌の画論書『画禅室随筆』の一節「万巻の書を読み、万里の路を行き、胸中より塵濁を脱去すれば、自然、丘壑、内に営まれ、鄧顛(輪廓の意)を成す。手に随って写生すれば皆山水の伝神たらん」を座右の銘として実践した鉄斎は、俗世に染まらぬ文人の生き方を求め、内に営まれた丘壑、即ち「胸中の丘壑」を描いてきた。そこに博学多識を誇り膨大な和漢の書物から引いた詩句や名文、自作の詩を書して賛とした。長寿を何よりの喜びとし、自在の境地に至り最晩年に描ききった理想境たる仙境とは、正に詩画一如の世界であり「胸中の丘壑」そのものであった。他の追隨を許さぬ清澄で美しく透明感に満たされた仙境図のなかに、我々はあたかも仙人のごとき鉄斎の姿を見いだし、自身もかくありたいと願い、大きな感動を覚えるのであろう。長寿の鉄斎にあやかり、人々が求めた仙境に心遊ばせていただければ幸いである。(奥田素子)

[主要参考文献]

村越英明「開館30周年 鉄斎-仙境への道-」(鉄斎美術館 2005) / 奥田素子「鉄斎さんの家園生三秀草」(『大阪春秋』No 135 新風書房 2009)

# 《出品目錄》

[富岡鉄斎作品]

番号	名 称	制作年		年齢	寸 法	材質・彩色	員数
1	烟霞幽情図	元治1	1864	29	98.5× 31.9	紙本淡彩	1幅
2	愜趣帖・清娉帖	慶応3	1867	32	各 8.8× 13.4	紙本淡彩	2帖
3	高士隱栖図・松雲僊境図	明治3	1870	35	各167.0×360.6	絹本着色	6曲1双
4	蓬萊山図			30代	149.6× 47.0	統本淡彩	1幅
5	漁樵問答図	明治10	1877	42	146.4× 65.4	統本淡彩	1幅
6	古道照顔色帖	明治12	1879	44	各 23.0× 15.3	統本着色	1帖
7	漁隱図	明治17	1884	49	146.3× 80.6	紙本墨画	1幅
8	老子出関図・淵明遊興図			40代	各137.8× 63.9	紙本淡彩	対幅
9	武陵桃源図	明治24	1891	56	126.2× 50.0	絹本着色	1幅
10	群仙翫瓢図	明治24	1891	56	40.0×131.6	絹本着色	1面
11	東方朔図			50代	133.8× 53.2	紙本淡彩	1幅
12	伯夷叔斉像			50代	128.1× 52.0	紙本淡彩	1幅
13	蝦蟇鉄拐図			60代	125.5× 50.1	絹本墨画	1幅
14	溪山勝概図			60代	187.2× 99.9	紙本墨画	1幅
15	蓬萊僊境図			60代	139.3× 42.9	絹本着色	1幅
16	松芝剛勁図	明治38	1905	70	209.8× 71.1	紙本着色	1幅
17	壺天図	明治39	1906	71	122.8× 46.4	紙本淡彩	1幅
18	江山招隱図	明治42	1909	74	116.6× 42.2	絹本着色	1幅
19	梅溪清隱図	明治43	1910	75	139.3× 39.9	絹本着色	1幅
20	人生行楽図	明治44	1911	76	124.8× 40.6	紙本墨画	1幅
21	福祿寿図	明治45	1912	77	129.5× 52.0	絹本着色	1幅
22	武陵桃源図	大正1	1912	77	130.1× 45.0	紙本着色	1幅
23	巖棲谷飲図卷			70代	35.0×340.3	絹本着色	1卷
24	僊窟煉丹図			70代	28.0× 34.2	絹本着色	1面
25	東瀛神境図	大正4	1915	80	150.4× 81.4	紙本墨画	1幅
26	鹿門帰隱図	大正4	1915	80	37.7×123.0	紙本墨画	1面
27	群僊集会図	大正5	1916	81	188.0× 71.2	絹本着色	1幅
28	王元之竹樓記図	大正6	1917	82	169.6× 70.8	絹本着色	1幅
29	群僊集会図	大正6	1917	82	139.6× 36.2	絹本着色	1幅
30	寄情丘壑図	大正6	1917	82	145.5× 52.3	絹本着色	1幅
31	幽溪漁隱図	大正6	1917	82	142.9× 51.1	絹本着色	1幅
32	柳陰漁楽図	大正7	1918	83	141.7× 41.8	絹本着色	1幅
33	東瀛僊苑図	大正7	1918	83	74.9× 85.8	絹本着色	1幅
34	乘桴浮海図	大正8	1919	84	165.4× 50.0	絹本着色	1幅
35	茂松清泉図	大正8	1919	84	153.5× 51.1	絹本着色	1幅
36	二僊授受図	大正8	1919	84	151.0× 40.4	紙本淡彩	1幅
37	東瀛神山図	大正9	1920	85	132.5× 42.0	絹本着色	1幅
38	福祿寿図	大正9	1920	85	131.5× 63.8	紙本着色	1幅
39	溪山招隱図	大正9	1920	85	171.0× 71.1	絹本着色	1幅
40	瀛洲僊境図	大正10	1921	86	130.5× 32.1	紙本淡彩	1幅
41	溪居清適図	大正10	1921	86	146.0× 40.0	紙本着色	1幅
42	空山静境図	大正10	1921	86	141.2× 41.0	絹本着色	1幅
43	僊游蓬萊図	大正10	1921	86	50.8× 63.8	紙本着色	1幅
44	真愛山居図	大正10	1921	86	145.8× 39.2	紙本淡彩	1幅
45	仿米岳峙淵渟図	大正10	1921	86	各 25.3× 40.1	紙本淡彩	1帖
46	孫真人山居図	大正10	1921	86	145.9× 40.4	紙本着色	1幅
47	心遊仙境図	大正11	1922	87	131.9× 33.7	紙本着色	1幅
48	寿老図	大正12	1923	88	132.5× 32.0	紙本着色	1幅
49	静居至楽図	大正12	1923	88	145.8× 40.4	紙本着色	1幅
50	瓢中快適図	大正12	1923	88	132.2× 31.8	紙本淡彩	1幅
51	西王母像	大正12	1923	88	131.0× 47.0	紙本着色	1幅

52	層巒閣図	大正12	1923	88	146.5×40.3	紙本墨画	1幅
53	杏花村荘図	大正12	1923	88	38.0×28.0	紙本淡彩	1面
54	寿老人像	大正13	1924	89	134.6×33.2	紙本着色	1幅
55	松芝不老図	大正13	1924	89	150.3×40.0	紙本淡彩	1幅
56	梅華書屋図	大正13	1924	89	145.6×40.1	紙本着色	1幅
57	千歳桃図	大正13	1924	89	131.8×33.3	紙本着色	1幅
58	蓬萊山図	大正13	1924	89	144.8×39.2	紙本淡彩	1幅
59	扶桑神境図	大正13	1924	89	144.5×39.3	紙本着色	1幅

[器 玩]

番号	名 称	制作年		年齢	寸 法	制作者など	員数
60	松芝不老繪香盆			70代	23.2×23.0×1.3	富岡鉄斎原画	1枚
61	長瓢杓	大正7	1918	83	長82.0 径10.2	中島菊斎・富岡鉄斎書	1本
62	松芝不老繪長方盆	大正11	1922	87	39.4×25.0×1.4	富岡鉄斎繪	1枚
63	亀絵桐雕盆	大正12	1923	88	47.0×27.5×2.5	中島菊斎・富岡鉄斎繪	1枚
64	蘭絵香盆	大正13	1924	89	47.5×36.0×4.2	中島菊斎・富岡鉄斎繪	1枚

[印 章]

番号	名 称	刻者・制作者	制作年	寸法(縦×横×高)	材質	員数
65	「山水友」印	尾形乾山造	江戸時代	3.2×2.5×2.9	陶	1顆
66	「今世霞客」印	山中信天翁刻	江戸時代後期	3.8×3.6×3.3	扶桑木	1顆
67	「行地小神僊」印	板倉槐堂刻	江戸時代後期	4.6×4.3×1.5	扶桑木	1顆
68	「江山風月」印	広山古山刻	明治43(1910)	3.6×3.5×6.6	陶緑釉	1顆
69	「無処避塵画山自隠」印	桑名鉄城	明治43(1910)	3.0×3.0×3.0	斑寿山石	1顆
70	「寿比南山福如東海」印		明治時代後期	3.5×3.6×3.9	木	1顆
71	「烏飛魚躍」印	富岡鉄斎刻	明治時代後期	11.1×6.6×8.9	桧	1顆
72	「無事小神僊」印	富岡鉄斎刻 初代諏訪蘇山造	大正10(1921)	8.2×8.4×15.9	青磁	1顆
73	「掃塵居」印	桑名鉄城刻	大正時代	3.8×1.5×4.7	黄蠟石	1顆
74	「如南山之寿」印	明人刻		5.5×6.2×5.9	斑寿山石	1顆
75	「蕉鹿図」印	清人刻		3.5×1.6×5.2	斑寿山石	1顆
76	「風月情懷」印	清人刻		3.0×1.6×3.8	斑寿山石	1顆
77	「山水為侶」印			1.6×1.6×3.6	白磁	1顆
78	「釣水樵山耕雲詠雪酌酒看華吟風弄月」印			2.4×2.4×6.8	鶏血石	1顆

・出品作品は期間中下記の通り2回にかけて展示します。但し一部重複することがあります。  
前期 4月1日(火)～5月11日(日) 後期 5月16日(金)～6月22日(日)

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。  
4月19日、5月3日・31日、6月14日 各土曜日の午後1時30分より

・今回の展覧会にあたり下記の方々にご協力を賜りました。記して感謝いたします。  
光明寺 (No.9)  
印章 (No.65～78) は鉄斎美術館寄託品

・次回展覧会 富岡鉄斎没後90年「鉄斎―書簡が語る名作秘話―」  
平成26年9月9日(火)～11月30日(日)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地  
TEL (0797) 84-9600  
FAX (0797) 84-6699  
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>